

東洋文庫
538

平凡社

太平樂府他

日野龍夫
高橋圭一 編

ひ の たつ お
日野龍夫

1940年東京都生。京都大学大学院文学研究科博士
課程修了。

専攻 日本近世文学。

現職 京都大学文学部教授。

主著 『宣長と秋成』(筑摩書房),『唐詩選国字
解』(平凡社東洋文庫)。

たかはし けい い ち
高橋圭一

1960年徳島県生。京都大学大学院文学研究科修士
課程修了。

専攻 日本近世文学。

現職 大谷女子大学文学部講師。

主論文 「実録『加賀騒動物』の諸相」(『国語国
文』57巻11号, 1988年), 「実録『秋田騒動物』
攷」(『読本研究』4 輯, 1990年)。

太平楽府他

東洋文庫 538

1991年8月9日 初版第1刷発行

編 者	日 野 龍 夫 高 橋 圭 一
発 行 者	下 中 弘
印 刷	株式会社 共立社印刷所
製 本	株式会社 石津製本所

電話編集 03-3265-0461 〒102 東京都千代田区三番町5
発行所 営業 03-3265-0455
振 替 東京 8-29639 株式会社 平 凡 社

© 株式会社 平凡社 1991 乱丁・落丁本は直接読者サービス係
Printed in Japan でお取替え致します(送料小社負担)

ISBN4-582-80538-8

凡 例

- 一、本書には近世の狂詩集『太平楽府』^{たいへいがふ}『太平新曲』^{たいへいしんきょく}『半可山人詩鈔』^{はんかさんじんししやう}の三点を収めた。
- 一、底本は次のとおりである。

太平楽府

日野龍夫蔵本。小本一冊（一八・二×一二・〇センチ）。卷末に『続太平楽府』（文政三年五月序刊）を含む版元錢屋惣四郎の広告一丁があるが、翻刻では省いた。

太平新曲

浅川征一郎氏蔵本。小本一冊（一八・一×一二・〇センチ）。

半可山人詩鈔

浅川征一郎氏蔵本。小本一冊（一五・八×一〇・八センチ）。

- 一、三点とも、本文には返り点・送り仮名・連字符が施されているが、翻刻に当っては、それらを省いたものを原文として上段に掲げ、それらに従った読み下し文を下段に掲げた。
 - 序・跋は、原文はすべて漢文であるが、読み下し文のみを掲げ、原文は省略した。
- 『半可山人詩鈔』で、詩の前後に注記が付されているものがあるが、これも読み下し文のみを掲げた。

一、本文・序・跋ともに、漢字は新字体・通行の字体に改め、読み下し文・振り仮名は新仮名づかいとした。

一、底本の文字を改めた場合は、その旨を語釈に記したが、明白な誤りは煩を厭って注記せずに改めた。

一、語釈中の引用文は、読解の便をはかって適宜表記を改めた。

一、紙幅の都合上、三点とも若干の詩を割愛せざるをえなかった。割愛した詩の題を解説「江戸狂詩の世界」の末尾に掲げた。

目 次

太平楽府

(見返し)……………四

太平楽府序 応昭子……………五

太平楽府序 業寂僧都……………九

卷之一 五言古詩……………六

遙かに寝惚先生に寄す……………一六

棋を観る……………二〇

風の神を送るを観る……………二三

桜嫁を経……………二四

婢女行……………二六

卷之二 五言律

講釈の席に至る……………二七

戲場を観る……………二九

亡者の黒谷に之くを送る……………三〇

江都の古原……………三三

彦八を悼む……………四四

人の質屋に之くを送る……………四六

七言律

書生に贈る……………四九

人の娼婦を連れて欠落するを留む……………五〇

河東の夜行……………五三

戲場、事を書す……………五五

卷之三 五言絶句

河東曲……………五七

借金……………五九

伊勢道中六首(うち三首) 鈴鹿……………六〇

関……………六二

山田……………六三

新嫁娘……………六五

入講、懐い有り……………六六

開帳場……………	六
京都の侍士……………	七
武士詞二首（一）……………	六
（二）……………	充
娼家の払い……………	充
蟾を咏ず……………	七
江都少年行二首（一）……………	七
（二）……………	三
七言絶句……………	
僧に寄す……………	七
嫁前曲……………	七
青楼曲……………	七
友人に示す……………	七
口舌詞……………	七
時行物を咏ず……………	六
花子に寄す……………	六
風を引く……………	六
述懐……………	六

（跋）桑津貧楽……………	六
（奥付）……………	六
太平新曲……………	
（見返し）……………	九
（序）娛息齋主人……………	九
太平新曲序 依様齋晁采……………	九
卷之一 五七言古詞……………	一〇
木葉儒者を嘲る……………	一〇
送別…………… 鈍狗齋愚仏……………	一〇
一蔽医、貧乏の棒を折り、頭を刺……………	一〇
って借錢を辞し、將に毒性庵……………	一〇
の漫遊を学ばんとす。是れ皆、……………	一〇
此まで毒性に紫円を飲ませ、梅……………	一〇
肉を遣いたるの報いなり。行に……………	一〇
臨んで一詩を乞う。因りて賦し……………	一〇
て之を遂ぐ……………	一〇
神に禱る…………… 愚仏……………	一〇

少年行……………	鳥山人……………	二九
卷之二 五言律		
祇園祭 雜咏三首 (一)……………		二三
(二)……………		二三
(三)……………		二三
禁酒行……………	愚仏……………	二六
下婢を咏ず……………	郷可潭……………	二四
七言律		
和尚の大黒を囲うに贈る……………		二四
江戸者、京を嘲る……………		二四
又……………		二四
京者、江戸を嘲る……………		二四
又……………		二五
茶漬屋。口号……………		二五
七言排律		
精靈 祭を賦す……………		二五
綿帽子姑蘇楼に登る……………	無名氏……………	二六
卷之三 五言絶句		

振袖……………		二九
自前……………		二九
西石……………		二九
橋下……………		二九
腎虛山人、大切に及ぶ。為に自業		
自得の吟を作る……………		二七
籠細工の釈迦……………	愚仏……………	二七
古意……………	同……………	二七
面白き事を詠す……………	同……………	二七
七言絶句		
中京を過る……………		二七
先斗町に宿して感有り。二首		
(一)……………		二七
(二)……………		二七
雜詩……………	愚仏……………	二七
何羅傑必天氏……………		二八
半可山人詩鈔		

(見返し).....	一六
半可山人詩鈔序 穆念仁.....	一七
卷上.....	

吉原.....	一八
船饅頭.....	一九
顔見世、三升先生に呈す.....	二〇
神拝の曲.....	二一
半田奉納の歌.....	二二
『吉原細見』の後に書す.....	二三
初松魚.....	二四
友人の賀養子に之くを送る.....	二五
柳を詠す.....	二六
中元。蜀山先生に呈す。二首.....	二七
.....	二八
質屋の通帳に題す。八韻.....	二九
吉原即事.....	三〇
京著行.....	三一

初夏、遙かに金令翁の市松の浴衣の作に同ず.....	三六
朝妻舟の図に題す.....	三七
四条の顔見世を観て、慨然として二丁町を懐うこと有り.....	三九
祇園の晚帰.....	四〇
浮瀬の即興。同じく賦して「蓋」の字を得たり.....	四一
祇園の懷古.....	四二
京都の偶作.....	四三
友人の女郎買いに之くを送る.....	四四
臭風の姪。折助に贈る.....	四五
名代部屋の排悶.....	四六
歳暮の急作.....	四七
駱駝怨.....	四八
友人の女郎を連れて逃げると聞き、内々此の寄せ有り.....	四九
笑絵の巻物に題す。三首.....	五〇

浅草先生の嘱の為にす (一) …… 三〇

(二) …… 三〇

(三) …… 三〇

巴人亭の集いに、本庄駅の藪医西

尾寛仲至る。言う、今春風邪流

行、療治大きに手柄を為すと。

即席に韓翃の詩を盗みて、賦し

て贈る …… 三〇

郷食山人に贈る …… 三〇

附けたり、郷食山人、韻を次ぎ

て答うる詩 …… 三〇

売薬の曲 …… 三〇

蕉園、鎮炮町 新宅の春集 …… 三〇

忠臣蔵狂詩集序 …… 三〇

日本一の阿方の鏡序 …… 三〇

卷下

日本一の阿房の鏡 初段 …… 三六

二段 …… 三七

三段 …… 三七

四段 …… 三七

五段 …… 三七

六段 …… 三七

七段 …… 三七

八段 …… 三七

九段 …… 三七

十段 …… 三七

十一段 …… 三七

跋 穆念仁 …… 三六

跋 瞰田伊崎杉 …… 三六

解説 江戸狂詩の世界 …… 三六

太平楽府他

江戸狂詩の世界

高日

橋野

圭龍

一夫

編

太^{たい}

平^{へい}

楽^が

府^ふ

銅^{どう}

脈^{みやく}

先^{せん}

生^{せい}

著

銅脈先生著		
太平 楽 府		
書肆	長才房蔵	

本書の見返し。狂詩集は、通常の書物と同じように、見返し・序文・跋文・奥付などをちゃんと備えて、実際には次の「長才房」のようにふざけたことを書き、内容だけでなく、書物の体裁においてもパロディの面白みを發揮しようとする。

○書肆 本屋の意。 ○長才房 近世の書肆は、通常の……屋という屋号のほかに、……房とか……楼とかいう雅号を持つものが多かった。それを模したもの。長才房は、普通は嘲齋坊ちようさいぼうと書き、おっちょこちょい、とんまなどの意。本書の版元、京都の書肆佐々木惣四郎の雅号は竹苞楼ちくほうろうであって、長才房ではない。

○蔵 この書物の板木を所蔵している、の意。現代風にいえば版權の所在を示す語。

太平楽府序

太平楽とは、其の鉄炮の能く大に能く放いままなるを謂う。京師の人銅脈先生、喜んで太平楽を唱う。其の曲、長うして屑あり。其の音、濁りて以て鯨なり。頗る道楽と相似て、同じからず。譬えば乞食と儒者と、其の形相似て、其の薦を被ると被らざると同じからざるが如きのみ。寢惚の謂わゆる糞と味噌との類なり。

嗚呼、先生、此の集を編するや、口謾りに惡態を衝き、楽則ち太平に究り、兼ねて陽春白雪の声色と高視闊歩の身形とを皺屈にせんと欲する者は、寢惚先生に負けぬ氣か。抑々また出来過ぎなり。

先生、色を正しうして曰く、「否、然らず。否、然らず。吾、西国に泓田百万石を取り、谷神を有頂天の外に遊ばしむ。笑何ぞ其れ人の尻を拭うことを為さんや」と。予、窃かに舌を出だして笑つて曰く、「又かいな」と。

応昭子序す

○太平楽府 太平楽と楽府とを合せて、この狂詩集の題名としたもの。太平楽は、好き勝手なことをいうこと。「太平楽を並べる」という。楽府は、漢代に設置された民間の歌謡を採集する役所のことであるが、転じてその採集された歌謡をいい、さらに一般に民間の歌謡をいうようになった。したがって「太平楽府」とは、「太平楽のように好き勝手なことを述べた歌」の意となる。

○鉄炮 うそ。ほら。当時の俗語。炮は砲に同じ。○京師 天子の都。京都を指す。

○銅脈先生 作者畠中観斎の戲号。解説参照。○太平楽を唱う この狂詩集を作った、の意。

○鰯 聞きづらいなどの意の俗語か。○道楽と相似て この太平楽

は、下に楽の字が付く点で、道楽と似ているが。○儒者 儒者批判は、宝曆・明和

ごろの談義本にもしばしば見出されるが、それは概して、口に孔孟の道を説きながら、

その身の徳行は修まらないといった論旨のものである。儒者を乞食と同列に置くという

のは極論で、貧しいとか金銭をほしがるとかいった点をとらえてのことであろうが、こ

の序文の筆者「応昭子」(未詳。あるいは銅脈自身か)の儒者に対する厳しい見方を物語る。

○薦を被る 乞食が着物の代りに薦をかぶること。乞食の身なりとして類型化されてお

り、乞食に身を落とすことを「薦をかぶる」ともいう。○寝惚 寝惚先生こと大田

南畝を指す。解説参照。○糞と味噌 『寝惚先生文集』の「水懸論」という狂文で、

儒者と僧侶などが互いに他の悪口をいうことを、「猶お人の味噌を糞なにして、吾が糞を味噌にするがごとし。糞も味噌も一にして、始めて吾が糞の臭きを知らんのみ」と述べているのを指す。 ○悪態 悪口。 ○楽則ち太平に究り 太平楽というところに

落ち着く、太平楽という形を取る、という意味のことを、前の「口謾りに悪態を衝き」と対句になるように表現したもの。 ○陽春白雪 古代中国の楚この国の歌謡の曲名。

楚の宋玉の「楚王の間に對こたう」(『文選』)に、ある人が陽春白雪を歌ったところ、ついで唱和する者が数十人しかいなかったとあり、高級過ぎて一般人には分りにくい詩などの比喻によく用いられる。声色は、歌舞伎役者などの物真似のことであるが、ここでは「陽春白雪のような高級な詩を吟ずる声の調子」の意。 ○高視闊歩 高いところから物を見、遠慮なく大股で歩くこと。自分を高いものとして世俗を蔑視すること。身形は、そういう態度。 ○皺屈にせんと欲する 『寝惚先生文集』によって確立された

狂詩文というジャンルが、漢字ばかりが並ぶという堅苦しい形式を持ちながら、好んで卑俗な素材を取り上げて、形式と内容のアンバランスから来る滑稽さを意図することを、陽春白雪・高視闊歩というべき漢詩文をわざと目茶苦茶にしようとするものと形容した。 ○出来過ぎ ここでは、気が利き過ぎている、抜け目が無さ過ぎるの意。 ○色を正しうして 真面目な顔になって。 ○泓田百万石 泓田は泥の深い田。深田の字を